

オリーブの会通信

2013年7月9日

発行：特定非営利活動法人KHJ香川県オリーブの会
〒760-0078 高松市今里町一丁目499-2
連絡先 TEL/FAX 087-843-9877 (川井)
<http://khj-olive.com/>



第133回月例会ご案内

日 時	2013年7月28日(日) 13:30~16:30 (受付:13:00~)
場 所	香川県社会福祉総合センター 6階 (第1・2研修室) 高松市番町1-10-35 Tel 087-835-3334
内 容	13:30 ~13:40 報告・連絡 (川井理事長) 13:40 ~14:00 「若者と社会をつなぐ」プログラムから 行動分析によって“気付かされた” ことなどを発表 2~3名 さぬきサポステ浅田先生の家族のための講座 (徳島大学の境先生考案プログラムより) 14:00 ~15:00 ビデオ学習「人とうまくつきあえない」 いじめ・虐待と自閉症スペクトラム 6/29再放送分 NHK 15:00 ~15:15 休憩 15:15 ~16:30 グループ別話し合い
参 加 費	・会員1家族 1,000円 ・非会員1家族 1,500円

暑中お見舞い申し上げます

讃岐路の山野の緑も濃くなり、四国の梅雨明けも 8 日発表になりました。

夏本番となり猛暑日が続いておりますが、皆様にはお元気で過ごしのことと存じます。

さて、先月 16 日、香川県社会福祉総合センターにおいて、オリーブの会法人化 5 周年記念講演会が多数のご出席を得て成功裡に終えることが出来ました。

とりわけ、引きこもりは、地域社会全体で取り組むことで未来に繋げられるものであると再認識されたのではないのでしょうか。

ご参加いただいた皆様には、心より厚く御礼申し上げますと共に今後ともよろしくお願い致します。

【6月の記念講演会他の概要】

- 1 と き 6月16日(日) 13時30分から16時40分
- 2 ところ 香川県社会福祉総合センター7階第二中会議室
- 3 出席者 69人(来賓、当事者、家族、行政機関、支援者、一般)
- 4 概 要 松本一幸副理事長の総合司会により講演会他が開催されました。その概要は次のとおりです。

(1) 挨拶と紹介

ア 川井富枝理事長挨拶

オリーブの会は目的を持ち会員相互の連携協力により法人化 5 周年を迎えることが出来ました。現在も種々の課題を抱えておりますが、地域のご理解を得るため、今回の講演会は公開としています。

特に、今回は、若者の視点に立って 10 年以上にわたる実態調査をされている池上氏から貴重なお話をいただけるものと思います。

今後とも皆様のご支援を受けながら出来ることを進めてまいりたいと思っています。

イ 田尾寿夫香川県健康福祉部障害福祉課課長

香川県では 23 年 6 月にひきこもり地域支援センター(アンダンテ)を開設し相談に応じ適切な支援に努めている。

24 年度は、センターに 474 件の電話相談、保健所に 677 件の電話相談が寄せられた。

今後は、同センター・保健所が相互に連携し、対応能力の研修会の開催など総合的に実施していきたい。

ウ 山本博司参議院議員<<メッセージ代読>>

現在、全国 39 か所にひきこもり地域支援センターが置かれ、アウトリーチ、居場所作り、就労支援などの課題はまだ山積している。制度の狭間で悩む方々の声を国会に届け支援に取り組んでいきたい。

エ 池田佳世全国ひきこもり KHJ 親の会代表

オリーブの会発足後 10 年以上経っているということは、親たちがかなり成長した証しだと思っている。

困難な道のりを歩んでいくには行政機関と連携をもち、いろんなところと連携を持たないとやっていかれない。

今年の全国大会は、福岡で開かれます。そこで、家族会のなかでやってきた特化すべき事等をみんなで話し合いたいと思います。親の成長が子供を良くするという精神科医(ひきこもり外来)中垣内先生のお話もあります。

福岡大会では青年の会もあるので是非ご参加ください。

オ 都築信行香川県議会議員

お一人お一人の声は、長い活動で国を動かし着実に新制度をスタートさせた。引きこもり地域支援センターが香川県にも出来、今後、ピュアサポーター制度も始まるとのことなので、後押しをしたい。

カ 岡野朱理子高松市議会議員

ひきこもり経験者で本人の苦しみ、家族の苦しみがわかる一人として共感するところがあるので、行政ともども「生活困窮者自立支援法」の適用や、社会的孤立を防ぐためのアウトリーチ型支援も行っていきたい。

キ 春田敬司高松市議会議員

地域で暮らす一人として3年前から積み重ねてきた「思い」や「動ける力」「働ける力」をひきこもり問題に生かしていきたい。

ク 行政機関の担当者（3人） 紹介

- 藤田 順子氏（香川県精神保健福祉センター副主幹）
- 香西 真由美氏（高松市保健所保健センター副センター長）
- 木村 佳奈江氏（高松市保健所保健センター係長）



(2) 記念講演会 要旨

一部

「香川のひきこもりの現状と課題」

講師：香川大学大学院教育研究科教授 竹森 元彦氏

ア 現 状

オリーブの会とは数年前から関わりがあり、困った時、講演会の企画、コーディネートなどしてきたが、ここ数年で香川県の動きも大きく変わったと肌で感じている。

昨年の高松市との協働企画提案事業「地域でひきこもりを考える」は、高松市にも丁寧にフォローしていただいた。高松市×親の会×地域支援者を掛けあうことにより、学びあえる、教えあえる関係ができた。

- 「ひきこもり」については、継続して関与し、変化させていくもので、家族だけでは解決に至らない。
- 「オリーブの会」活動～ 月例会の開催、居場所活動（ポパイの会＝当事者の会を月1～2回開催）、オリーブの会通信を毎月発行、特にH24年度高松市協働企画提案事業「地域でひきこもりを考える」の実施～ ひきこもりは地域で再考することで未来につながる、地域はいろんな人達が集まる場所、いろんな方とつながっていける。

地域の中だからこそ未来が創れるのではないか。 9/2 開催の講演、ワークショップではいろんな人と考える場のデザインを描く。12/16 には、それぞれの立場（親の会、アンダンテ、保健所、サポステ、当事者）でお互い顔を見て話を聞くことができ、お互いの理解が深まる、連帯感が深まる、そして率直に語り合う。そこには当事者がいる。当事者の言葉に耳を傾ける。治療する側、支援する側よりも本人たちはどうなのか。そこにエネルギーが膨らんでいく感じがした。

インターネット交信、パンフレットの作成（エンパワーしていく、当事者から学び未来につなぐことになる）

- 「ポレポレ農園」のんびりゆっくり、農業しながら社会復帰をめざす。
- 「ひきこもり地域支援センター(アンダンテ)」歩くような速さで、支援の連携により回復を目指す。
- 「就労支援」さぬき若者サポステにて居場所活動（25年度から）、就労まではいけない若者たちが支えあっていく場所、学ぶ場所。
- 「青少年育成支援ネットワーク研修講座」（地域の課題を県男女共同参画課・香川大学が行った） 当事者として自分たちのことを話すことは不安があるが、一歩進んだことにより地域のなかで意識が変わってきた。
- 香川大学でも「同研修講座」を開催。

イ 課 題

① 親の高齢化と当事者の高年齢化・長期化

ひきこもり状態が継続するのを、何らかのかたちで介入して変化させていく必要がある。社会と家族は連動しているので、本人、家族、社会の支援、アウトリーチ、居場所活動、仲間同士のピュアな関係が悪循環を変えていくことになると香川県における数年の活動のなかで感じている。

親の会だけでなく、当事者も支援者も地域の人も一緒に考える場として未来につなげていければと思う。

「親のバックアップ力（りょく）」

講師：全国ひきこもり KHJ 親の会代表 池田 佳世氏

- ひきこもりは、ひきこもってから元気になるまで一筋縄ではない、だから困難である。
親も一人で解決しようとするので「語り合う場所」が大切である。
ひきこもりの方は人間である。人間が困難を乗り越え育っていつて働けるようになるまでには、いろんな段階があつて、困難を呈しながら少しずつ歩むことである。
- ひきこもり支援は、複数の機関が関わる総合的なわざである。「場所から

場所へ」「時間から時間へ」のつながりである。

- 心の病気は、環境を整えるだけでは駄目で、心の病気を改善して社会につなげていくことであるので、支援団体の方にわかってもらえるには時間がかかり艱難辛苦もあるが、親も色々知恵をだし成長しなければならない。
- 親が子供のバックアップをするには、親が率先していろんな方の力を借りて元気にしないといけない、気持ちを明るく自尊感情を上げ、無条件の肯定的関心を持って親同士で楽しいことを企画していただきたい。子供は、「どうしてひきこもったのか」の問いに「死ねなかったから」という答えが返ってくる。親として「生きていて良かったね」の原点があれば、これ以上のものはない。怒りが爆発、憎しみ、恨みなどが出てきても「変化の兆し」という賞賛する雰囲気で見守っていく。そうすれば、子供は「自分を大切なものだ」という感情の変化に繋がっていく。学校問題、居場所を見て廻るなど、子供は常に親の交渉力を見ている。
- 就労については、今、本部でも色々考え、企業とも話しながら探している。最近、障害者を含めた企業も増えているし、仕事困難者向けの共同事業もある。また子供自身が起業している所もあるので、色々と考えていかれたい。
- 「親のバックアップ力」は、子供が何か言い始めた時の「親の動き」です。
(齊藤万比古氏の 6/15 講演より一部引用)

二部

講演「ひきこもり当事者たちから学び未来をつくる」

講師：ジャーナリスト 池上 正樹氏

16年位前からひきこもりを追いかけて約200人の当事者とお会いし、インタビューをしてきた。ひきこもり者は、皆、優しくてものを言えないお人好しタイプが多く、就職できても厳しい状況にある。今後は「雇われない生き方」を仕組みに取り入れていきたい。

1 はじめに

ひきこもり者は自分の未来をどうやって創っていくか。親の介護、自身の病気、失職等で社会に戻れなくなり、長期化、高年齢化しているので皆で関わっていく必要がある。

当事者たちの潜在能力を世の中に生かしていくには、タイミングもあり

「待つ」こともあるが、動き出すタイミングの時にバックアップできる体制が必要である。

当事者は、「人や社会のために」なら動き出せることが多いので、支援する側とされる側が対等な関係を持って皆で仕組みを模索することが大事である。

2 ひきこもりを取り巻く世界

一般の関心のある方を巻き込んでいくということでは、竹森先生の「地域でひきこもりを考える」という試みは非常に大事である。世界観を広げて、当事者、家族、支援者・専門家、一般の関心のある人の4分類で一緒に考え

ていく。とくに（地域の）一般の人たちをどう巻き込んでいけるかがカギになる。

3 震災から把握できたこと

把握できた被災地のひきこもりパターンは、

- 避難で出来なかった（死亡・生還ケース）
- 避難出来た（集団生活になじめなかった・繋がりをつかんだケース）
- 震災を機にひきこもった（今もひきこもったまま・再び外に出られたケース）

となっている。

ひきこもり者の中には、「津波より人間関係が辛い」という人もいた。

ひきこもりの本質がここにある。

ひきこもりの人たちも「災害弱者」であり、日頃から発信しない。家族は社会から隠すが、家族だけでは助けられないので、命の守り方を日頃から意識しておくことが大事である。

事例1 石巻市では、4日間4人の当事者が共同作業をスタッフに代わって行った。

事例2 仮設住宅で閉じこもっていた当事者が臨床心理士のアドバイスでお年寄りが入る仮設住宅周辺の草むしりを始めた。

事例3 停電のよる一家団欒、保険会社の家屋被害調査、家族のために並んだ給水車などをきっかけに、家族や社会とのコミュニケーションが生まれた。

自分より弱い立場の人と出会ったときや役割やルールを与えられた時に変化が起きた事例である。日常の中でも応用ができるのではないか。

4 転機をチャンスに利用

非日常の世界ではお金が使えない、被災者は皆平等、経歴や所属を聞かれない、弱者を目のあたりにして生かされた運命を受け入れたとき、変化が生まれた。人のためにチャンスを生かしたのは当事者本人にとって大きかった。

5 当事者から学ぶ

① 40歳代男性（15年間ひきこもりの元会社員）

震災の映像を見て涙が止まらなかった。母親との生活を切り離し、生活保護の受給を受け入れたことで、心に余裕が生まれ、自らの健康のことまで考えられるようになった。自らの意思で入院し、病院のスタッフから「自分のことを考えなさい」と一日50回言われ、自分の確立に向かった。

② 40歳男性（25年近い空白のある元正社員）

両親の放置で引きこもりが長期化し、「親があてにならない」とバイトを始めるも、しがらみを断ち切れず疎外感を感じている。ただ、内に秘めた事業アイデアを持っている。

③ 20代女性（バイトからひきこもり）

親は亡くなり、親戚は威圧的、脅迫的で相談できる人がいないで一人

泣きながら眠る毎日であったが、ひきこもりから脱却しかける方々の存在を知ると自分も脱却できるのではと少し希望が湧いてくる。

6 高学歴無職者の共通項

本人は「学歴は何の役にも立たない (35%)」「むしろ邪魔 (5%)」、親は「偏差値の高い大学へ (57%)」となっている。
高校、大学までは順調、社会で挫折、周囲の期待が高く、重要な仕事を任せられ期待に応えようと無理してパンクし経歴の修復が困難となる。友人（情報力）、人脈が少なく、テクニカルな手段を嫌がるので椅子取りゲームで譲ってしまう。世間話が苦手ということから、プレゼン力を磨くのではなく、周囲が寄り添って価値を引き出す仕組み作りが大事である。

7 未来をつくる

- 「楽の会西東京」では、全員参加型（当事者 13~14 人、親 30 人）の対話を実験的にやってみたところ、重たかった親たちに笑顔が生まれた。
- 「フューチャーセンター」という対話の場で、皆が対等の場に立つ。ひきこもり者の経験・知識、得意な表現にヒントがあり、当人たちもモチベーションが上がる。

8 当事者から生まれたアイデア

- ① 「ひきこもり大学」講師は当事者たちで、経験知識を講義する。生徒は家族、支援者、専門家、一般人とする。家から出られた人に呼び掛けていく。家から出られない人からも「期待している」との反応がある。
- ② 「ひきこもり白書」当事者たちで作る全国初の「ひきこもり」のデータベース化。収益は参加者で分け合う。
- ③ 「タレント事務所」タレントは才能と考え、人材バンクとして得意分野で開業する手伝いをする。
- ④ 「デリバリー対話」当事者のプロフィールなどをリストアップし、家から出られない当事者や、一人暮らしの高齢者に指名してもらい、派遣する。
- ⑤ 「百円ミーティング」聞きたい人は当事者に百円を支払う。当事者のモチベーションアップにもなる。

9 自ら動き出す

- ① 「中高年人材センター」呼びかけると 17 人集まり、ビジネスプラン等情報交換している。親の立場から拠点施設提供の申し入れもある。
- ② 「自助グループ交流会」大阪のグループ（Y さん）紹介
当事者が交流する場所で、悩みや課題のある者の支えになればという思いである。自助グループはひきこもりを確認する場である。
 - 男性当事者 グループに参加して率直に話をさせてくれたことが良かった。いろいろな意見を繋げ続けていくことができればと思う。

- 女性当事者 自分の思うひきこもりのイメージが違っていた。活力を持っていて未来のことを考えるグループです。前向きでない発言も受け入れられてまた参加したい。

10 ネットからの反応

自分の中にある思いをメールで発信できる。自分の意思で動き出す。人の役に立って感謝されたい等。

11 まとめ

従来の支援・役割は変化する必要がある。ひきこもり者はひきこもっていない人たち（相手も変化してくれる）との対話を求めている。潜在能力が生かされる未来の仕組み作りが重要である。

三部 「未来をつくる」ディスカッション（9グループの椅子円席）

司会：竹森 元彦氏

○はじめに

参加者を9グループ（椅子、円席）に分け、講演を聴いての感想や、疑問・質問等について話し合い、その結果を代表が発表するものとする。

○各グループ代表発表（要旨）

- ① 色々な立場、想いの人の話を聴いて熱い想いが伝わった。
このような集まりがあって良かった。
当事者からは自分の問題として考えることができたことが、一番の支援と思う。
- ② 親は社会の激動を認識し、なぜ動けないか分かってくる。親の社会力（ひきこもりを恥ずかしいと思わない力）が必要です。
- ③ 人との接し方で新しいものに気付かされた。
- ④ 子供が何を考えているのか分からないが、分かろうとすることが感じられることが大事なのではないか、子供のために親は自分の人生を楽しむことが大事だ。
- ⑤ 親子の意思疎通の大切さを感じた。
- ⑥ 父と娘のかかわりはそっとしておき、親は出られるキッカケを用意する。
- ⑦ 自分のこととして行動していきたい、自助グループは人と繋がり、人の力を借りながらやっていきたい。色々な人の協力を得ながら仕組みが出来ればいい。四国にも自助グループが出来ればいい。在宅ワークも考えている。
- ⑧ 余り意識しない人との関係を当事者は真剣に考えており、ひきこもりといっても人によって対応の仕方が全然違うのだなというのがわかった。
- ⑨ ひきこもり者は打ち込めるもの、好きなものを見つけると次のステップに進み、起業することも考えられる。

○まとめ

ひきこもり問題については、当事者、家族、行政機関、学生、特に一般の方（もっと増えて）に理解してもらって、こういう活動は社会全体の問題として意味のある活動をしているんだ、と自信をもって発言してもらいたいと思う。

以上

【7・8月 居場所活動予定】

内 容	月	日	曜日	時 間	担 当
2013年度第4回運営委員会	8	4	日	13:30～	川井
個人カウンセリング (松田 勝先生)	7	13	土	9:00～	加藤
ポパイの会 	7	21 31	日 水	13:00～居場所集 合 13:30～	平野 森下 加藤
家族交流会	7	21 31	日 水	13:30～	川井
個人カウンセリング (松田 勝先生)	8	10	土	9:00～	加藤

回	日 時	内 容	参加者
1	7月21日(日) ポパイの会 13:00 居場所集合 *若者・学生は車で 下記施設へ移動 *香川医療生活協同 組合 <u>はーもにー</u> オリーブの会	○「お菓子作り」 *レシピ作成、材料購入(学生さん) *当日 若者参加者は、手伝い *エプロン、三角巾、タオルなど持参 →住所:高松市太田上町228 →電話:(087-888-7172) →○「家族交流会」途中で合流	*若者 4~5人 *学生 4人 *グローバル・シッ プスこうべ 2人 <u>計 18~20人</u> *親 6~7人

※お問い合わせは 090-4332-3288 (川井携帯) までお願いします。
参加者の人数は 事前に確認済みの方の人数です。

【おしらせ】

平成25年度 ひきこもり対 策連絡協議会	1) ひきこもり地域支援センターの活動状況について 2) 各機関のひきこもり支援(対応)状況について 3) 情報交換「ひきこもり対策の推進に向けて」
日 時	2013年7月9日(火) 13:30 ~ 16:30
場 所	香川県高松合同庁舎 4階 第2会議室(高松市松島町1-17-28)
四国の若者 交流会	「当事者の交流・語り合い」
対 象 者	四国のひきこもり当事者、 生きづらさを抱えている若者、 親も参加自由です。当日は別に部屋を借りています。
日 時	2013年8月11日(日)・ 13:30 ~ 16:30
場 所	アイパル香川、第一会議室 (高松市番町1丁目11-63)
参 加 料	500 円 ※懇親会に参加される方は実費個人負担です。